

Viva Kango

Campus News of the Japanese Red Cross Hokkaido College of Nursing



日本赤十字社
Japanese Red Cross Society

日本赤十字北海道看護大学

看護研究演習ポスター 発表会が開催されました

十二月十六日(金)、看護学部四年生による看護研究演習(卒業論文)発表会が開催されました。

今年の演題数は六十八題で、総勢一七名の学生が一年間の研究成果を発表いたしました。その内容は、アンケート調査によるもの、インタビューによるもの、文献検討、実験研究など多彩なテーマで論文を仕上げていたようです。発表はポスター形式で、五分の発表時間と二分の質疑応答時間が設けられました。一〜三年生も発表を聞きに訪れており、四年生の発表を興味深く聞き、時折、質問を投げかける場面も見られました。

四年 奥山 雄太

私は生態科学領域で実験研究を行いました。実験を始めたのは、実習終了後だったので、研究に集中することが出来ました。国家試験の勉強と並行していかなければならなかったため、研究と勉強の時間を決めて取り組むようにしました。研究の方法は看護系のものとは違い、解剖や免疫染色といった内容であったため、何もわからない状態からのスタートでした。

しかし、先生の助言を受けたり、過去の研究論文を読んだりすることで、少しずつ理解することが出来たと思います。実験研究だったので失敗は付き物で、何度か失敗したこともありましたが、そのたびに先生から何が原因なのかアドバイスをもらい、実験を続けていきました。研究の最中は失敗するたびに大変な思いをしました。しかし、振り返ってみると、少しでも試行

錯誤をしながら研究を行っていたため、勉強になることが多く、興味を持って研究に臨むことが出来ていたと思います。

この看護学研究演習は、自分が興味のある領域で研究を行うことが出来るため、やる気も出やすく、学びやすいと感じました。そのため、研究領域やテーマを決めるときには、自分の興味のあるものを選び、たくさんさんの学びを得られると思います。

四年 木下 洋平

看護研究演習では研究計画書に始まり、アンケート、論文、発表用ポスターの作製、そしてポスター発表という数多くのステップを共同研究の仲間と協力して乗り越え、研究を学ぶことができました。何をすればいいのかわからず白紙のまま悩む日が続き、アンケート実施後に情報不足に気づいたり、分析できない情報に追われたり、

時には研究と実習の重圧からメンバーが不仲になったり、またある時には正しい日本語が分からなくなってしまうほど文章に悩むこともありました。そのすべての過程で研究の難しさと奥深さを実感できたような気がします。また、これだけ悩み、時間をかけて作り上げたからこそ自分の研究内容を知ってもらい、問題点に気づいてほしいという研究する人の目的ともいえる感覚も得られたのではない

かと思っています。長い時間をかけて研究を学べる環境があるからこそ大学で看護を学ぶ意義があり、この経験を臨床にも還元していきたいと思っています。

四年 湯谷 詩織

私ははじめ研究の面白さがわかりませんでした。しかし、研究をしようとする段階で他のメンバーがさまざまな視点から、疑問を持つっており、それを明確にしていこうとなるとどんどん興味がわいてきました。最も疑問に思ったことに着目し、先行研究を読んでいく中で明確にしたい部分を絞っていききました。その中で自分の疑問と思った中のほんの一部を知ること、自分もその疑問の一部に少し手をかけることしかできないことに気がつきました。しかし、現在、明確になってきていることすべてはそういった積み重ねだと気がつきました。また、研究をしていく中で自分の実施したことで傾向がみえたり、先行研究と通じるところがあると研究が楽しくなってきました。研究を進める中でデータをうまく利用し、結果として反映させるためには、研究方法を吟味し、具体的な計画を立案することが大切だと実感しました。今回の研究では今後、看護師として看護研究を行うための基盤を学び、研究の楽しさも感じることでできたいと思います。



看護開発センター主催の「講演会」

人が人をケアする ～これからの看護に求められること～

平成二十四年二月十九日(土曜日)午後六時から八時まで看護開発センター主催で講演会が、本学講堂で開催されました。

講師は、昨年第四十三回フーレンス・ナイチンゲール記章受賞者の村松静子(むらまつ せいこ)先生でした。

村松先生は、日本赤十字中央女子短期大学を卒業され、日本赤十字社医療センターICUおよび日本赤十字看護大学の設立を経て、ボランティア訪問看護チームの「在宅ケア保障会」を結成され、その後在宅看護研究センター設立の代表に就任されました。



在宅看護の先駆者として整備されていない看護の次の道を探みながら、懸命に看取る中で、遠藤周作氏や永六輔氏らの著名人とも出会い、後押しを受けながら、数多くの人たちの看護にあたってきた。

座右の銘は、「看護は実践無くして語れない」といわれ、常に、看護の実践と理論の融合をめざし、ボランティアから真剣勝負の在宅看護の道を歩まれました。看護師になって四十三年、看護教育の道に入ってから三十九年、在宅看護活動二十八年、今尚、看護への熱い挑戦が続いていることについて、ゆつくりと在宅看護の場面を、パワーポイントで示しながら語られました。

この「講演会」は、日本赤十字北海道支部にある日本赤十字北海道看護大学札幌サテライトと初めてテレビ会議システムで同時中継もされました。受講者は、札幌周辺に勤務する一〜九期生の六名でした。テレビ映像は、高画質・高音質であり、本学講堂の参加者と感動を共有することができました。また講演会終了後は、村松先生を囲んで本学卒業生の一〜六期生の十名と懇談会を学生食堂で開催しました。卒業生は、日頃の仕事

を振り返る良い機会になり、看護への思いや疑問などを温かく伝えていました。

出席者は、一般の方五十二名、本学学生百五十名、本学教職員三十名、合わせて二百三十二名と多くの参加者がありました。

参加者のアンケートの大多数は、①開催時期「良かった」、②開催曜日「良かった」、③開催時間「ちょうど良い」、④会場「良かった」、⑤講演内容「良かった」と大変良い評価をいただきました。

早速、日赤の大先輩からの看護の学びを、明日からの仕事に生かして行きたいと思えます。



岩手県陸前高田市における被災者健康生活調査活動に参加して

陸前高田市から日赤六大学に「被災者健康生活調査」に関する派遣依頼があり、本学からは地域看護学領域の大西教授と村上講師、看護薬理学領域の根本准教授の三名が十一月九日から三日間、この調査に携わりました。市内の割り当てられた地区を担当し、地図を見ながら個人宅に避難している被災者を訪問しました。被災者から健康状態を確認していく中で、継続支援が必要と考えられる人を把握して引き継ぎを行いました。

自宅を津波で流され、近くの親戚宅に避難している高齢の方は、震災で知人が亡くなるなどしてこれまで築いてきた人間関係が変化して閉じこもりがちになっていました。また、震災を機に通院・服薬を中断し体調不良を感じながらも、家族を失った悲しみで受診する気持ちになれない方もおりました。更には、家や職も失い、先が見えない不安の中で暮らしている方もおり、身体的状況、精神的状況から健康面でこの先も心配な方々がたくさんいらっしゃいました。このような状況から、継続した支援をどのように工夫して行っていくかが重要なのではないかと感じました。また、経過を追う中で被災者の状況に合った必要なサービスや資源が途切れることなく提供

されるよう、地域の情報をもとにした支援が今後は更に必要になってくるのではないかと思います。プレハブの商店やコンビニができて町の復興が進んでいるように感じますが、それに反してまだまだ支援が必要な方々がいること、そして時間の経過と共に健康上のリスクを増す方々が現れる可能性を感じたことから、息の長い継続した支援が今後も続いてゆくことを強く願います。



国際看護プロジェクト主催の講演会

平成二十三年十一月二十九日(火曜日)午後六時から本学講堂を会場に国際看護プロジェクト主催の講演会が開催されました。

講師には、経済連携協定(EPA)によりフィリピンから平成二十一年五月に来日し、足利赤十字病院に勤めるかたわら、平成二十二年三月には看護師国家試験に合格したエヴァー・ガメッド・ラリンさんをお招きし、「看護師として働くフィリピンと日本、サウジアラビアの看護」というテーマで講演が行われました。

エヴァーさんはフィリピンの大学で看護師の資格を取得後、フィピンとサウジアラビアで勤務した経験から日本を含めた各国の看護師の業務の違い、文化の違い、患者様の特徴などの興味深いお話があり、さらに日本における外国



人看護師候補生の受入体制などにも触れられて、勉強のサポート体制や三年以内で合格しなければならぬという制度の改善点なども語られました。

一般の方、学生、教職員合わせて約百六十名の参加があり、盛況のうちに講演会を終了いたしました。



公開座談会

「3・11東日本大震災からの学び
被災者の目線で減災を考える」を開催して

平成二十三年十一月五日(土)、本学において、東日本大震災の支援活動を経験された四名の方をお招きして公開座談会を開催いたしました。

三月十一日に発生した東日本大震災は、日本中を震撼させるだけでなく、世界中に衝撃をもたらしました。そして、誰もが被災地のために何かしなくてはという気持ちを持つと同時に、誰もが被災者となり得るという教訓を得たのだと感じさせられました。災害が少ないと言われるオホーツク管内からも、現地へ向けて支援の手が差し伸べられました。

今回の公開座談会では、オホーツク管内から現地へ派遣された医療行政、ボランティア(社会福祉協議会)の方々との支援活動を通して、学んだこと、感じたこと、今後の課題などを語っていただきました。

そして、参加者の皆さまと共に、3・11からの教訓をどのように日常生活で活かしていったらよいのかを考える機会となりました。

医療救援活動においては、劣悪な環境の中で感染症を予防する工夫やオホーツク絆プロジェクトにおけるコミュニケーションの作り方、巡回健康相談で出会った認知症の方との対話から気づかされたこと、さらに、現場ニーズとボランティアとのマッチング業務など、様々な活動が発表されました。発表後には参加者のみなさんから、北見市の備蓄、防災に関するハード面の対応や人的組織の運営等についての質問や意見が出されました。

中でも市内の高校生から「今まであまり考えていなかった災害への備えについて考えさせられ、参加して良かった。」との反応が聞かれ、閉会後も発表者に積極的に質問をしていたのが印象的でした。

支援活動に派遣した各々の組織内では、活動報告がなされていると思いますが、いくつかの組織が参集しての報告は北見でも初めてだったのではないのでしょうか。また、様々な組織が協働して、支援に当たることの重要性を示した形となりました。また、「人の命と暮らしを守る」ことは、支援を受けるといふ受身的な意識だけでは成り立ちません。自らも積極的に身近なところから取り組むことが大切です。被災地での報告を聞きながら、いかに災害時の状況をイメージして準備していくかが問われると思われました。

河口学長が「実際の地震の時には、頭が真っ白でした。結局できたことは、訓練通りの事だけでした。ですから、訓練は大切なんです。」と開会の挨拶で話されましたが、今回の公開座談会も一つの訓練の形と言えるのではないのでしょうか。被災地の一日も早い復興を心よりお祈りいたします。



新任教員紹介



成人看護学領域
講師 園田 裕子

園田裕子(そのだゆうこ)と申します。私が看護師として働いた場所は、高度救命救急センターでした。緊迫した現場でしたが、看護を通して命の尊さ人間の素晴らしさを患者さんとその家族、一緒に働いた看護師や医師から学びました。

本学に赴任すると同時に、愛知県出身の私が「道民」の仲間入りをしていました。人生で初めての「水点下」を体験し、自然の雄大さに感動しながら、毎日届く「経済の伝書鳩」を読み北見をより深く知ろうと努力中です。皆様、どうぞ宜しくお願いします。



老年看護学領域
講師 成島ますみ

老年看護学領域に着任しました成島ますみと申します。横浜生まれの湘南育ちで、地元を離れての生活は初めての事です。

長年神奈川県で看護教育に携わって参りましたが、縁あって北見

に参りました。被災高齢者に関する研究をしております。

老年看護学は日本のみならず世界的に見ても、今後更に必要性の増す領域であり、広い視野に立ち、その在り方を看護学生の皆さんと考えて行きたいと希望しております。よろしくお願致します。



老年看護学領域
助手 出水美菜子

昨年十月から老年看護学領域の助手として着任しました出水(いずみ)美菜子と申します。本学の六期生で、卒業後は看護師として臨床経験を積み、大学に戻って参りました。

教育の現場で働くのは初めてですが、短い経験の中でも高齢化が進む世の中での、老年看護の必要性を改めて感じております。皆さんの日々の学びに少しでも貢献できるように、また共に成長できるように努めていきたいと思っております。どうぞ宜しくお願いします。

六大学交流

二年 高山智佐都

私たちは広尾で行われた日本赤十字看護大学生交流会に参加しました。始めに、各大学の紹介を行い、同じ赤十字大学であっても地域により様々な特色があることを知りました。その中で看護を学んでいる学生が集まり、考えを共有することで、深い学びができました。東日本大震災の初動班として活躍された看護師さんや助産師さんの講義や、四肢と言語に障害を持った方の講演を聞いたり、震災があつた今、「看護学生として何ができるのか」ということや「理想の看護師像について」でディス



カッションを行ったりしました。講義や講演は、とても興味深い内容で、看護とはどういうものなのか、ということを考えさせられました。

イルミネーションを公開しました

平成二十三年十一月より、大学構内にイルミネーションを設置し、市民の皆様も見ることができるようになりました。

昨年は東日本大震災、豪雨災害と相次ぐ天災に見舞われ、いまだに苦しんでいる被災者の方々も多いと思われませんが、復興に希望の明かりを灯す、という考えの下、イルミネーションを設置しました。少しでも早く、被災者の皆様の生活が元に戻ることを切に願います。



設置にあたっては、本学の災害研究サークル「beats」の学生たちが主体となって行いました。

編集後記

立春が過ぎましたが、まだまだ寒い日が続いております。四年生は国家試験の月です。全員の合格を祈るばかりです。今回は、看護研究演習と各講演会を主体に組みました。Viva Kango第三十三号をお届けいたします。少しずつですが日が長くなってきております。春待ち遠しい今日この頃ですが、どうかお体ご自愛のほど。

立春が過ぎましたが、まだまだ寒い日が続いております。四年生は国家試験の月です。全員の合格を祈るばかりです。今回は、看護研究演習と各講演会を主体に組みました。Viva Kango第三十三号をお届けいたします。少しずつですが日が長くなってきております。春待ち遠しい今日この頃ですが、どうかお体ご自愛のほど。



日本赤十字北海道看護大学学内誌
Viva Kango

第33号

発行日/2012年2月29日
編集・発行/広報委員会

〒090-0011 北海道北見市曙町664-1
TEL (0157) 66-3311 FAX (0157) 61-3125
mail to : kouhou@rchokkaido-cn.ac.jp
http://www.rchokkaido-cn.ac.jp